
魔法少女リリカルなのは ~ 悲しみを断ち切る者 ~

ひなたぼっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは
　　く悲しみを断ち切る者く

【ZU-1】

N
3
4
6
8
U

【作者名】

ひなたぼっこ

【あらすじ】

とある世界で最強と謳われた男が「リリカルなのは」の世界に転生した。彼は魔法という摩訶不思議な力が存在する世界でどう生きていくのか！？

プロローグ（前書き）

はじめまして、ひなたぼっこです！

初めての投稿なので至らぬ点などありますが、生暖かい目で見守っていただけると幸いです。どうかよろしくお願いします！！

ブローグ

「????? side」

「やるしか…ないようだな」

俺はそう呟きながら前を見据える。

その先には剣や銃といった武器を俺に向けて構える兵士達の姿があった。

戦うことが既に日常となっていてしまっている俺にとって、普通なら何の問題も無かったのだが…

「（数が多いな。軽く千は超えている。）」

敵の数があまりにも多かった。

さすがにこれほどの人数を相手に戦った経験は俺には無い。

「これは、骨が折れそうだ」

俺は覚悟を決め今まで共に戦ってきた愛刀を鞘から引き抜く。

そして

「行くぞオオオオ!!」

敵に向かって駆け出した。

これが俺、クロード・レインハートの最後の戦いだった。

プロローグ2

くクロードsideく

「……ここは？」

目が覚めると俺は真っ暗な世界に立っていた。

ここが何処なのか、どうしてこんなところにいるのか解らず頭を悩ませていた。

「俺は、たしか……っ！？」

やがて俺はここに来る前に何があったか思い出した。

「アイツらと、戦ったんだ…」

そうだ。俺はあの兵士達と戦い、勝つ事まではできた。

だが、その戦闘でかなりの深手を負い、その場で倒れ、そして……

「死んだんだ」

不意に今まで過ごしてきた日々を思い出す。

「思えばいろんな事があつたな」

目の前で悲しんでいる者、苦しんでいる者を助けようと心に決め、
ひたすら理想に向かって走り続けた。

その中で

たくさんの笑顔に出会えた。

たくさんの幸せを見ることができた。

例え戦い続けた結果が死だったとしても、俺は…

「後悔は無い」

そう言った瞬間だった。

突然目の前から光が入ってきた。

あまりの眩しさに目を開ける事が出来ない。

「一体、何が…!?!」

何が起ったのか分からないまま俺は意識を失った。

s i d e o u t

「おめでとうございます。元気な男の子ですよ。」

声が聞こえる。

目を開けてみるが、視界がぼやけてよく見えない。

「本当によくやった。優衣」

また声が聞こえた。男性の声だ。

声のした方へ体を動かそうとしたが、うまく動けない。

「あなた、この子の名前なんだけど…」

今度は女性の声。

「そうだな。決めないといけないな」

もう何が何だか分からず悩んでいると、誰かに抱き上げられた。

最初は体が急に浮いたので驚いた。

しかし、その腕の中が

「私が決めてもいいかしら？」

とても温かくて

「いいぞ。どんな名前なんだ？」

とても優しくて

「ありがとう。この子の名前は……」

心が落ち着いた。

「刹那。瞬間、瞬間を大切に……一生懸命に生きてほしいという願いをこめて」

ここから俺の第二の人生が始まった。

プロローグ2（後書き）

次回は主人公の設定を書こうと思います。

主人公設定

神谷 刹那

性別 男

本作の主人公。

性格は基本的に穏やかで優しい心の持ち主。しかし、たまに他人のために自分自身を犠牲にしてしまうところがある。漆黒の髪をポニテールのようにしており、かなり整った顔立ちをしている。異性から好意の目で見られる事も多いのだが、恋愛に関して鈍感なので気づいてない。クロード・レインハートが転生した姿。

クロード・レインハート

性別 男

かつて最強と謳われた剣の使い手。戦いの末、命を落とした。

第1話 出会い

「…………ん」

目を開ける。見慣れた天井だ。

時計を見ると時刻は朝の5時30分を指していた。

ベッドから起き上がりカーテンを開ける。

まだ空は暗さが残っている。

服を着替え、肩まで伸ばした漆黒の髪をポニーテールのように纏めると刹那は部屋を出てリビングに向かった。

〈刹那 side〉

あの日…クロード・レインハートが死に、神谷刹那として生を受けた日から4年の月日が過ぎた。

あの時は正直、驚いた。

気が付いたら自分が赤ん坊になっていたのだから。

”輪廻転生”なんて言葉があるが、まさか自分が体験するなんて思いもよらなかった。

転生した世界も俺が生きていた世界と全然違っていた。

俺の世界には車やコンビニなんてものは無かった。

日本なんて国も無かったから、ここが日本の海鳴市と知った時、ここが自分がいた世界とは違う世界だと分かり衝撃を受けた。

だがそれも今となっては良い思い出だ。

そんなことを考えているとリビングに着いた。

ドアを開けて中に入る。

「おはよう。 母さん」

俺は既にリビングにいた母に声をかける。

「あら刹那、おはよう。」

この人は俺の母親の神谷優衣。

とても子持ちの母とは思えないくらい若く見える。

俺が弟と見られてしまつくらいに。

ちなみに俺のこの黒髪は母さん譲りだ。

「今日もランニング？」

と母さんに聞かれたので

「何か毎日やってないと落ち着かなくて」

と答えた。

「行つてきます」

「いつてらっしゃい」

母さんとの会話を済ませランニングに出かける。

このランニングを始めたのが1年前、つまり俺が3歳の時だった。

実はこれを始めたのには理由があった。

体が動かないのだ。

正確に言えば、俺の思考に体がついていけないのだ。

さすがにマズイと思いトレーニングを始めた。

ランニングだけじゃなく両親が見てない時に木刀で素振りをするなど、少しでも俺の思考に体がついてこれるように鍛練に励んだ。

最初はすぐに息切れしたり腕が上がらなくなったりしていたが、最近では息が切れることも少なくなっただし、長時間素振りをしてても大丈夫なくらいになってきた。

それでも前世の俺の動きと比べると…。

そんなことを考えながらランニングを続けるのだった。

ランニングを終えて家に入り、シャワーで汗を流す。

シャワーから出てリビングに入ると

「お帰り刹那。相変わらず頑張ってるな」

コーヒーの入ったカップを手に持ち、テーブルの椅子に座りながら

俺に声をかける男性がいた。

俺は声をかけた男性の方へ振り向き

「ただいま、父さん」

と返した。

この人が俺の父親の神谷修一。

我が家の大黒柱だ。

家の近くにある病院で医者をしていて、病気や怪我などでやって来る患者を診察している。

俺の尊敬する優しくて正義感の強い父親だ。

3人で朝食を食べた後、仕事に行く父さんを見送り、俺は自分の部屋で本を読んでいた。

この国の文字の読み書きは既に覚えたので本を読むことなど簡単だ。

今では俺の趣味のひとつとなっている。

本を読むことに没頭していると

「刹那ー、お昼ご飯よー」

という母さんの声が聞こえたので時計を見てみると12時になっていた。

本を閉じてリビングに向かい、母さんと一緒に昼食を食べる。

昼食を食べた後、特にやることもなかったなので散歩に出かけた。

side out

????side

私、高町なのは。年は…えっと…4歳。

今日は大好きなお母さんと一緒にお買い物に来ました。

お店の中に入ると、もう買う物を決めていたのかお母さんはかごの中に商品を入れていったの。

お買い物も終わり、お店から出て少し歩くと、お母さんが急に立ち止まった。

「あつ、いけない！！お醤油買うのを忘れてたわ。」

どうやら買い忘れてた物があるらしい。

「ごめんね、なのは。お母さん、お醤油買いにもう一回お店に行くんだけど、なのはも来る？」

ってお母さんは言うてくれたけど

「うん。ここで待ってる」

ちょっとはしゃぎすぎて疲れてしまったので待つことにしたの。

「ごめんね、すぐに戻るからね」

そう言ってお母さんはお店の方へ戻って行ったの。

私は待つてる間、辺りを見渡していると一人の男の子が目に入った。

黒い髪を後ろで纏めていて、私と同じくらいの男の子なんだけど、何か他の人と違うような感じがしたの。
どうしてか分からないけど…

私はその男の子をずっと見ていた。

そんな時だったの。

「キャアーーーー!!」

突然近くで悲鳴が上がったの。

声のした方に視線を向ける。

私の目に映ったのは

倒れている女性と

ナイフを持った男の人が私の方に向かって走って来ている姿だった。

逃げなきゃ……

そう思ったけど

怖くて体が動かない。

男の人が、どんどん近づいてくる。

「なのは!?!」

お母さんの声が聞こえたような気がした。

「どけ————!!」

誰か…助けて!!

そう願った時

さっきの男の子が私の目の前に現れて

「ふっ!!」

右手を勢いよく男の人のお腹目掛けて殴ったの。

「ぐはっ!!」

すると男の人は殴られたお腹をおさえながら気絶しちゃったの。

「大丈夫か？」

男の子が私の方へ振り向く。

さっき見たときは顔がよく見えなかったので改めて男の子の顔を見
てみると...

すごく.....かつこよかったの／／／

side out

＼刹那side＼

「大丈夫か？」

俺は振り返りながら後ろにいる女の子を見る。

栗色の髪をツインテールにしている女の子だった。

怪我はなさそうだが一応無事が聞いてみた。

しかし、いつまで経っても女の子からの返事が無い。

不思議に思い、女の子の顔を見ると

「……………／／／」

顔を赤く染め、じっと俺の顔を見つめていた。

「…顔が赤いけど、本当に大丈夫か？」

心配になったので、もう一度聞いてみる。

「にゃ？！／／／だ、大丈夫なの！！」

どうやら大丈夫みたいだ。

女の子の無事を確認した後、俺は引ったくりの男が倒れている場所を見る。

男は事情を聞き付けた警官によって捕まっていた。

警官の人は俺にお礼を言ってから、気絶している男を連れていった。

鞆を取られた女性も俺にお礼を言ってくれた。

周りから称賛の声が聞こえる。

何故こんなに盛り上がっているのだろうか？

たかが引ったくり一人倒しただけで

いくら体が思考についていけない状態でも、あの程度の相手なら何の問題も無い。

そんなことに疑問を抱いていると

「あ、あの!!」

女の子が俺に声をかけてきた。

「なんだ？」

とりあえず何の用か聞いてみる。

「助けてくれてありがとう」

と言ってペコッと頭を下げた。

「気にしないでいいよ。君に怪我が無くて良かった」

俺は微笑みながら言った。

「わ、私、高町なのは。なのはって呼んで。君の名前は？」

顔を赤くしながら女の子ー高町なのはーが尋ねる。

「刹那。神谷刹那だ」

俺も自分の名を名乗る。

「よろしくね！刹那くん」

なのはが笑顔で俺の名前を呼ぶ。

「ああ、よろしくな。なのは」

俺も彼女の名前を呼ぶ。

こうして俺は転生して初めての友達ができた。

第2話 決闘！？（前書き）

戦闘描写が難しい…

キャラの喋り方も難しい…

もう全てが難しいです。

でも頑張ります！！

第2話 決闘！？

「準備はいいか？」

二本の木刀を持った男が前方を睨みつけながら尋ねる。

その視線の先には短めの木刀を持っている4、5歳くらいの子供、神谷刹那の姿があった。

「いつでも」

刹那は自身の木刀を握り締め、いつでも戦えるように構える。

「では……行くぞ!!」

男はそう言った瞬間、刹那に向かって駆け出す。

刹那も男を迎え撃とうと木刀を振るう。

そして互いの武器がぶつかり合う音が響き渡った。

話は数時間前に遡る…

〈刹那 side〉

引ったくりを捕まえた俺は、なのはと友達になった。

これからどうしようかと悩んでいると

「なのは!!」

こっちに向かって来る女性を見つけた。

なのはの名前を呼んでいる事から、おそらく彼女の家族だろう。

「お母さん!!」

どうやら母親だったらしい。

女性はなのの下にたどり着き、なのを抱きしめた。

「なのは…良かった」

涙を流しながら娘を強く抱きしめる、そんな光景を見て自然と笑みがこぼれた。

「どこも怪我は無い？」

「うん！刹那くんが守ってくれたから！！」

「刹那くん？」

2人が会話をしているところを眺めていると、突然なのはが俺の所に来て俺の手を掴み彼女の母親の所まで連れて行かれた。

「その子が？」

「うん！神谷刹那くん。さっき私が襲われそうだったのを助けてくれたの！！」

なのはが俺を紹介する。

するとなのはの母親が俺の方を向く。

「はじめまして、刹那君。なのはの母の高町桃子です。なのはを助けてくれてありがとう。」

なのはの母、桃子さんが俺にお礼を言った。

「はじめまして、神谷刹那です。」

とりあえず俺も桃子さんに自己紹介した。

「私、駅前の商店街にある喫茶店でケーキを作ってるの。娘を助けてくれたお礼もしたいし、良かったら寄ってもらえないかしら？」

突然桃子さんがそんなことを言い出した。

「そんな、お礼なんて…。俺がそうしたくてやっただけなので、気にしないでください」

さすがに悪いと思い断ろうとしたのだが

「行こうよ、刹那くん！お母さんの作るケーキすごく美味しいんだよ！！それに私、もっともつと刹那くんとお話したいの」

俺の隣にいたなのも誘ってきた。

さすがにこれ以上断るというのも逆に失礼と思い

「それじゃあ、お言葉に甘えて…」

行くことにした。

「やった……！！」

本当にうれしそうな笑顔でなのはがはしゃぐ。

「じゃあ早く行こう 刹那くん、こっちこっち……」

「ちよつ、なのは!？」

「あらあら」

笑顔で俺の腕を掴んで進むのは。

されるがままに連れて行かれる俺。

そんな俺達を見て微笑みながら歩く桃子さん。

目的地に着くまで、この状態が変わる事は無かった。

「ここが？」

俺は目の前の建物を指差す。

「うん！ここが喫茶”翠屋”だよ」

俺の質問になのはが答えてくれた。

「さあ、入りましょう」

桃子さんの一声で中に入る。

すると店の奥から若い男性が出てきた。

「おかえり、2人とも。おや、そちらの男の子は？」

男性が俺の存在に気付く。

「刹那くん。私が危ないところを助けてくれたの」

なのはが俺の事を説明する。

「本当なのか？」

男性が桃子さんに聞く。

「ええ、あなた。実は…」

桃子さんはさっきの出来事を男性に話した。

「そうだったのか…、娘を助けてくれてありがとう。僕は高町士郎、なのはの父親だ。よろしくね、刹那君」

この人がなのはの父親か。
優しそうな人だ。

だけど気配で分かる。

この人…強い。

「神谷刹那です。こちらこそ、よろしくお願いします。土郎さん。」

この人が何者なのか…、少し疑問に思った。

自己紹介も終わり、なのはと一緒のテーブルに座り、この店の人気商品であるシュークリームを頂く事になった。

現在、シュークリームが出来上がるまでの間、なのはと話しながら待っている。

主になのはが質問して俺が答えるという形で話している。

どこに住んでいるとか、いつも何をしているとか、好きな食べ物の事とか、等等など。

話しの中で、俺の家となのはの家が以外と近い場所にあるということも分かった。

カリーン

そんな話を続けていると、突然店の入口から扉の開く音が聞こえた。

入口の方を見ると、若い男女の姿があった。

「あ！おかえり、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

なのはが二人に駆け寄る。

「ただいま、なのは」

少し大人びている顔立ちをしている男性が言う。

「ただいま、なのは。あの子お客さん？」

眼鏡をかけている女性が俺の方に視線を向けながらなのはに尋ねる。

「違うよ、私のお友達。刹那くんって言っの。」

なのはが二人に俺を紹介した。

「そうか、俺は高町恭也。なのはの兄だ」

「私は高町美由希。なのはのお姉さんだよ。よろしくね、刹那君」

「神谷刹那です、よろしくお願いします。」

「お兄ちゃん、お姉ちゃん。刹那くんってすごいんだよ!! 実はね
……」

なのはが二人に話し出した。

「へー、そんなことがあったんだ」

「妹が世話になったな、ありがとう」

「いえ、気にしないでください」

なのはの説明も終わり、恭也さんと美由希さんを加えた4人で会話を続けていると

「出来たわよー」

桃子さんがシュークリームを持って士郎さんと一緒に出てきた。

「さあ、召し上がれ」

俺となのはの前にシュークリームが置かれる。

「食べよ、刹那くん」

「そうだな、いただきます」

そう言ってシュークリームを口に運んだ。

「美味しい…」

おもわずそう呟いてしまった。

「だよね、だよね！お母さんのシュークリーム美味しいよね！」

なのはが嬉しそうに語る。

「うん、本当に美味しい」

俺もなのはの言葉に頷く。

「ふふ、ありがとう。遠慮しないで食べてね」

桃子さんも微笑みながら言ってくれた。

「はい、ありがとうございます」

俺はそう言ってまた食べはじめた。

なのはと一緒に食べていると

「本当に仲良しだね、なのはと刹那君。今日知り合って友達になったとは思えないよ」

美由希さんが突然そんなことを言い出した。

「うん。だって私、刹那くんの事大好きだもん!」

なのはが笑顔で言った。

士郎さん達もなのはの笑顔を見て微笑む。

そんな光景を見て、俺はふと昔を思い出した。

前の世界では、幼い頃に両親に捨てられ、友と呼べる者もいなかった。

そんな俺がこの世界に転生して、両親がいて、友達ができた。

そう思うと心が温かくなった。

S i d e O u t

なのはの笑顔で周りは暖かい雰囲気にもまれていた。

「本当に仲良しだね。ね、恭ちゃん……恭ちゃん？」

美由希は恭也に話し掛けるが反応が無い。

疑問に思い美由希は恭也を見る。

しかし俯いているため顔がよく見えない。

すると恭也が動き出した。恭也は刹那の目の前で止まった。

「恭也さん、どうかしたんですか？」

刹那は恭也の行動に疑問を感じ恭也に尋ねる。

「刹那…俺と勝負しろ」

「はい？」

突然恭也に勝負を挑まれた刹那だった。

そして現在に至る。

刹那達は高町家の道場にいた。

恭也は小太刀の木刀を二本持ち、刹那は短めの木刀を一本持っていた。

周りには高町家の人間が心配そうに二人を見ている。

「ごめんなさい、刹那君。うちの息子が…」

桃子が刹那に謝る。

「いえ、恭也さんもなのはの事を思っ
ての行動だと思いますから。
妹思いの良いお兄さんです」

「刹那くん…」

なのはが心配そうな目で刹那を見つめる。

「大丈夫だよ、なのは」

なのはの頭に手を置き、刹那は優しく微笑む。

「でも、お兄ちゃんすごく強いよ」

「分かってる。でも何とかなるさ」

そう言って恭也さんの下に向かった。

S i d e O u t

「準備はいいか？」

恭也は刹那に問う。

既に恭也は二本の木刀を構えている。

刹那は目を閉じ、心を落ち着かせる。

「（この体で果たして恭也さんに勝てるかどうか…）」

今の状態で恭也とともに戦えるか刹那は悩んでいた。

「（でも…）」

刹那はなのはの心配そうな顔を思い出す。

「（あんな表情されたら、負けるわけにはいかない…だから…!）」

目を開け、木刀を構える。

「いつでも」

周りが静寂で満たされる。

そして

「では、行くぞ!!」

恭也は刹那に仕掛ける。

「（俺は…必ず勝つ!!）」

刹那も自身の木刀を振り抜き、恭也の攻撃を受け止めた。

「なっ!？」

恭也の顔が驚愕に染まる。

まさか自分の攻撃が受け止められるなどと思っていたいなかったからだ。

「ハアア!!」

刹那は恭也の木刀を弾き返し攻撃を仕掛けた。

「くっ!!」

恭也は後ろに下がり刹那の攻撃を避けた。

しかし僅かに攻撃が腹部に掠っていた。

「（危なかった…あと少しでも遅かったら、終わっていた）」

恭也は腹部を触りながら考える。

「（これは…油断しているとやられるな）」

刹那の実力が本物だと判断し、恭也はさっきよりも速い速度で刹那に仕掛けた。

（刹那Side）

「（さっきよりも速い。それに…）」

俺は恭也さんの右からの攻撃を防ぐ。

「（重い…！）」

あの一撃から急劇に恭也さんの動きが変わった。

まあ、それが狙いだっただが

手加減されたままじゃあ納得いかない。

やはり戦うからには本気の恭也さんと戦いたい。

思考を巡らしていると、恭也さんが俺の背後に回った。

避けようと思ったが体が思うように反応できず避けられない。

「くそっ…！」

仕方なく俺は振り向き様に木刀を振り、恭也さんの木刀を受け止める。

しかし…

「ぐっ!？」

やはり力の差があり、後ろに弾き飛ばされる。

何とか踏ん張り、転ぶ事は無かった。

恭也さんはこちらの出方を伺っている。

その間に俺は現在の状況を整理する。

速さも力も向こうが上…

なら…

「（足りないものは、技術と経験で補う!!!）」

恭也さんが動き出す。

俺の背後に回り、片方の木刀を振り下ろす。

俺はそれを自らの木刀で受け流し、その勢いのまま切り掛かる。

恭也さんがもう片方の木刀で防ぎ、さらに追撃に掛かる。

だがその攻撃は既に予測していたので簡単に避けることができた。

俺はそのまま恭也さんの背後を取り渾身の一撃を叩き込む。

「ぐっ!!」

防がれてしまったが、恭也さんは衝撃を殺し切れず後退した。

ここからが本番だ!!

S i d e O u t

あれから30分が経過した。

戦況はさつきと変わっていない。

刹那はひたすら恭也の攻撃を受け流し、隙ができるのを待つ。

そして一瞬でも隙が生まれた瞬間

「ハア!!」

間髪入れずにカウンターを仕掛ける。

だが決定打にはならず、恭也に防がれる。

恭也も攻撃をするが刹那に受け流されるので、いまだ決定打は無し。

この攻防が数分間続いた。

何回か打ち合った後、互いに距離を取った。

「（このまま続けば、体力的に俺の方が不利…なら！！）」

恭也が刹那の右の脇腹目掛けて切り掛かる。

「（これで決める！！）」

刹那はそれをわざと受け止めた。

「ぐっ！！」

歯を食いしばり、足に力を入れて踏ん張る。

「フッ！！」

木刀を振り抜き、恭也の右手に持っていた木刀を弾き飛ばす。

「何！？」

片方の木刀を失った恭也は目を見開く。

その一瞬を刹那は見逃さなかった。

「ハアアアア！！」

刹那は木刀を勢いよく振り下ろす。

「ぐっ！？」

恭也はもう一本の木刀で何とか防ぐが、衝撃に耐えられず体勢を崩してしまう。

体勢を立て直そうとした時には、既に刹那が抜刀術の構えで間合いに入っていた。

「これで…終わりだ！！」

刹那は持てる力の全てを込めた一撃を放った。

しかしその一撃は空を切った。

「何!？」

突然、目の前にいた恭也が消えたのだ。

刹那は自分の背後に恭也の気配を感じ、恭也の攻撃をいなそうとしたが体がうまく反応できず防ぐことしかできなかった。

そして

バキッ

刹那の木刀が衝撃に耐えられず折れてしまい、恭也の攻撃が当たる。

「ぐあー!!」

刹那はそのまま吹き飛ばされ壁に激突する。

「く………そお………」

そう呟きながら刹那は意識を失った。

（剎那Side）

「ん…ここは？」

目を開けるとそこは見たことの無い部屋だった。

「そっか、俺、恭也さんに負けたんだ…」

多分俺が気絶したからこの部屋に寝かせたんだろう。

俺は天井を見つめる。

いつ以来だろうか、誰かに負けるなんて。

「悔しいな…」

やはり負けるのは悔しい。

そんな思いのまま、俺は体を起こそうとしたが

「（動かない）」

不審に思い布団の中を覗いてみる。
すると

「スウー、スウー」

「なのは？」

そこには静かに寝息をたてて眠るなのはの姿があった。

「刹那…くん…」

目に涙を溜め、寝言で俺の名前を呼ぶ。

気絶している間ずっと心配してくれていたんだろう。

俺は寝ているなのはの髪を優しく撫でる。

「…ん…刹那くん？」

なのはが目を覚ます。

「おはよう、なのは。といっても、もう夕方なんだけどな」

外を見てみると既に空は茜色に染まっていた。

「刹那くん！！」

突然なのはが俺に抱き着く。

「良かった…。何回も呼んだのに目を覚まさないから、心配したんだよ」

「ゴメン…なのは…」

俺はなのはが泣き止むまで優しく頭を撫で続けた。

その後、土郎さんと桃子さんが部屋に入って来ていろいろからかわ

れたのは余談である。

そろそろ帰らないといけない時間になったので、俺は家に帰る事にした。

「いろいろありがとうございました」

俺は玄関を出たところまで見送りに来てくれた高町家全員に挨拶する。

すると恭也さんが俺の前に来て

「本当にすまなかった。」

頭を下げて謝ってきた。

「あそこまでするつもりはなかった。だが想像以上に君が強かったから、つい本気で戦ってしまった」

「気にしないでください。大した怪我じゃありませんし、俺も恭也さんと勝負して良い経験になりましたので」

「だが…」

「でしたら、たまにで良いので稽古つけてください。」

俺は笑いながら言った。

「刹那……。ああ、分かった。君が来るのを楽しみにしてるよ」

恭也さんはそう言って、土郎さん達の方に戻っていくと、今度はなのはがこっちに來て

「刹那くん…もう帰っちゃうの?」

悲しそうな表情で言う。

「また遊びに來るよ」

俺が笑顔でそう言っと

「うん！その時は一緒に遊ぼうね！！」

いつもの元気な笑顔に戻ってくれた。

「それじゃあ、お邪魔しました」

高町家の人に挨拶する。

そして俺は高町家を後にした。

こうして俺の一日は終わった。

第2話 決闘！？（後書き）

感想お待ちしております。

第3話 異変（前書き）

初めての感想でいろいろとアドバイスを貰い、気合いを入れて書きましたが相変わらずのグダグダ…。

それでも見ていただけると幸いです。

第3話 異変

気がつくと少年は真っ白な世界にいた。

そこには少年以外に存在しているものはなく、全てが白に染まっていた。

少年は、ここと似た世界を一度だけ見たことがあった。

自分が死んで目が覚めたときに立っていた真っ暗な世界、そこ今いる場所が少し似ていた。

あの場所と同じ、どこか寂しい雰囲気のある世界だった。

どうして自分がこんなところに、少年がそう思った時だった。

「...た...け...」

突然声が聞こえた。

少年は自分以外に誰かいることに驚く。

「…だ…か…」

また聞こえた。

しかし声が小さすぎて上手く聞こえない。

周りを見してみる。

真っ白な光景が広がっているだけで誰もいない。

それでも微かに聞こえる。

悲しくて

切なくて

すぐにでも壊れてしまいそうな声が…

「誰か…助けて…」

「…………ハッ」

刹那は目を覚ます。

そこはさっきまでの真っ白い世界ではなく自分が普段使っている部屋だった。

「今のは、一体…」

体を起こし時計を見ると朝の5時を指していた。

さっきの夢が気になったが、とりあえず頭の隅に置き、いつものラニングに出掛けるのだった。

く刹那 sideく

高町家と知り合って半年が経過した。

あれからなのはほぼ毎日のように一緒に遊んでいる。

公園だったり、なのはの家だったり、俺の家だったり。

もちろん鍛練だっでしている。

あの勝負に負けてからランニングや素振りの量を増やし、たまに恭也さんに稽古をつけてもらっている。

本当に充実した毎日を過ごしていた。

でも一つだけ不可解な事があった。

それは高町家で稽古していた時の事だった。

「今日は最後に模擬戦をする」

稽古が終わろうとしたところで突然恭也さんが言い出した。

「日頃の稽古の成果を見たい。構えろ」

そう言いながら恭也さんは構える。

「お願いします」

俺は気合いを入れて恭也さんに挑んだ。

しかし

「ハア、ハア、ハア」

結果は敗北。

俺はその場に座り込み息を整えていると恭也さんが俺の所にやって来て

「お前は本当に不思議な奴だな」

と言ってきた。

「不思議…と言つと？」

訳が分からず恭也さんに聞いてみると

「どうも前回戦った時のお前と今回のお前の動きが少し違う感じがしてな…。まさか手を抜いているんじゃないかとも考えたが、戦ってる最中のお前の目を見ても、そんな様子は見られなかった。じゃああの時ののは一体なんだったんだろって不思議に思ったんだ」

という言葉が返ってきた。

結局そのあとの会話はなく、その日の稽古は終了した。

確かに恭也さんの言っていた事は、ずっと俺も気になっていた事だ

った。

自慢じゃないが俺の身体能力はかなり高い。

恭也さんに「4歳の子供とは思えない」と言わせたくらいだ。

だがあの日、恭也さんと戦ったときの俺はいつも以上の力を発揮できた。

普段なら反応できなかった攻撃に反応できた。

体がついて来れないという場面も何回があったが、少なくとも普段よりは格段に速く動けた。

思えば、あの引ったくりの時もそうだった。

襲われそうだった女の子、なのはを助けようとしたときも普段よりも強い力が出ていた気がする。

あの時は倒せるのが当然と思い込んでいたから忘れていた。

今の俺はクロード・レインハートではないという事を。

身体能力が高いと言っても所詮は子供。

いくら鍛えていたからって一撃で大人を気絶させるほどの力はない。

なら何故そんなことが起きたのか、それは今でも分からない。

「せ……く……」

実際、あれから体に異変は起きてない。

一体あれはなんだっただろうか。

「せつ……く……」

今日見た夢の事も気になる。もしかしたら、何か関係が

「刹那くん……」

「ん、どうした、なのは？」

突然大きな声が聞こえてきたかと思えば、なのはが俺の目の前まで詰め寄ってきた。

「どうしたじゃないの！何度も呼んだのに」

頬を膨らませながら睨んでくる。

そういえば、公園でなのはと待ち合わせしてたんだっけ。

俺が来たときは、まだ来てなかったから近くのベンチに座って待ってたんだった。

考えに没頭しすぎて、なのはの声に気づかなかった。

「悪い、少し考え事してて聞いてなかった…」

俺は苦笑しながら謝る。

「むう~~~~!!」

そう言ってなのは俺に背中を向けて拗ねてしまった。

これは、かなり怒らせてしまったみたいだ。

原因は俺だし、さすがにこのままというのはいけないと判断し

「ゴメンな、なのは」

なのはの頭を撫でながら謝った。すると…

「もう…今回だけだよ」

恥ずかしさで顔を赤くしながらも許してくれた。

「それじゃ早く遊ば、刹那くん」

なのははベンチから立ち上がり、ブランコの方へと走って行く。

どうやら機嫌は直ったみたいだ。

「そうだな」

俺もベンチから立ち上がり、なのはのいるブランコの方へと歩いていく。

今は、そこまで深く考える必要は無いのかもしれない。

悩んでたっしょうがない。

みんなに余計な心配をかけてしまっただけだ。

いつか分かる日が来るその時まで待っていれば良い。

だから今は、この時間を、この楽しい日々を大切にしよう。

なのはの笑顔を見ながら俺はそう思っただった。

s i d e o u t

「???? side」

どれくらい時間が過ぎたのでしょうか。

百年？ 千年？

もう忘れてしまった。

もうこんなところにいるのは嫌…

誰か私を見つけて…

ここから連れ出して…

誰か私を…助けて

side out

第4話 ひとりぼっち

＼刹那 side＼

あれから更に月日が流れ、俺は5歳になった。

だが5歳になっても相変わらず俺の生活は変わっていない。

鍛錬したり、読書したり、なのはと一緒に遊んだり…変わらない毎日だが俺は結構気に入っている。

それから来年の事だが、俺となのはは同じ小学校に入学する事になった。

なんでも、俺の知らない間に既にお互いの両親の間で決定していたらしく、なのはも一緒の学校に通えると聞いて喜んでいた。

かく言う俺も少し楽しみにしている。

なのはの笑顔を見ながら、こんな日がいつまでも続けばいいなっと思っていた…

だがある日、俺は信じられない事を耳にした。

なのはの父、士郎さんが病院に運ばれたのだ。

それもかなりの重傷で。

それからというもの、桃子さんは店の仕事、恭也さんもその手伝い、美由希さんは士郎さんの看病をする等、大変な日々が続いていた。

俺は、なのはが心配だった。

士郎さんが入院してからの数日間、なのはとは会えてないからだ。

父親が入院してるんだ、ショックになるのも無理はない。

だから俺は、なのはの様子を見るために高町家に向かった。

「誰もいない…か」

高町家に着いたが誰もおらず、留守だった。

「（翠屋にでも行っただか？）」

そう思い、今度は翠屋に足を運んだ。

「あら、刹那君。どうしたの？」

翠屋に着き中に入ると、目の前に桃子さんがいた。

「なのは来てます？家に行ったら留守でしたので」

手間が省けたと思い、俺は桃子さんに尋ねた。

「なのは？なのはだったら今日は公園で遊ぶって言ってたわよ」

公園に？

そういえば、まだ行ってなかったな。

「分かりました。じゃあ公園に行ってみます」

そのあと桃子さんに挨拶をしてから俺は店を出た。

そして俺は走った。

公園を目指して

そしてもうすぐ公園に着く所で、公園のベンチに座っているのを見つけた。

しかし

「…グスッ…」

そこから見たのは、いつもの明るく元気な姿では無く、寂しそうに声を殺して泣く姿だった。

俺は急いで彼女のところへと向かった。

そして

「何やってんだよ…なのは」

ひとりぼっちになっている彼女に声をかけたのだった。

s i d e o u t

くなのはs i d e

お父さんが入院した。

お母さんとお兄ちゃんはお店でお仕事、お姉ちゃんはお父さんの看病で忙しい。

本当は寂しかった。

もっと構ってほしかった。

家族が私から離れていくような感じがしたから…

家族の中で私一人だけが取り残されているような気がしたから…

でもそんな我が儘を言ったらみんなの迷惑になる。

「（刹那くん…）」

不意に一人の男の子が思い浮かんだ。

でも、もし我が儘を言って彼に迷惑をかけたなら…

怖かった 彼に自分を否定される事が…

怖かった 友達である彼に嫌われる事が…

怖かった 彼が私から離れる事が…

だから私はいい子でいようと思った。

いい子でいれば、誰にも迷惑にならない、嫌われずにいられる。

一人でいい子にしていれば…

「…グスッ…」

涙が流れる。

やっぱり無理だった。

寂しいよ…つらいよ。

お母さん…お父さん…お兄ちゃん…お姉ちゃん。

一人は嫌だよ…傍にいてよ…助けてよ

刹那くん…

「何やってんだよ…なのは」

突然そんな声が聞こえた。

ゆっくりと顔を上げて前を見る。

そこには

「刹那…くん」

優しげな顔をした彼がいた。

s i d e
o u t

「刹那 side」

「刹那：くん」

俺を見つめるなのは顔は涙でいっぱいだった。

「どうして泣いてたんだ？」

「な、泣いてなんかないもん」

なのはは服の袖で涙を拭う。

「刹那くんこそ、どうして此処に？」

「最近、一緒に遊んでなかったからな。心配して探してたんだ」

「ごめんね、心配かけて。でも大丈夫だから。一人でいい子にするから…」

そう言ってなのはは笑った。

でもその笑顔が嘘だったのは見れば分かる。

「本当に…大丈夫だから」

自分の手をギュッと強く握り締め、なのはは言った。

「（全く…こいつは）」

俺は、なのはの隣に座った。

「なあ、なのは。俺達が初めて会った日の事、覚えてるか？」

「ふえ？」

意味が分からないといったような表情をするなのはだったが、そんな俺は話を続ける。

「引ったくりに襲われそうだったなのはを俺が助けて、それがきっかけで友達になったんだよな」

なのはが頷いてくれた。

「それで翠屋に行つて士郎さん達と出会つて、シュークリームを食べさせてもらつて、あの時、美由希さんが俺達に「仲良しだね」つて言ってくれた時、お前何て言つたか覚えてるか？」

するとなのはは顔を赤くしながら

「お、覚えてないの」

と答えた。

「そっか、忘れちまつたか。でも俺は覚えてる。あの時お前は

うん、だつて私、刹那くんのこと大好きだもん！

つて言ってくれたんだ」

それを聞いた瞬間、なのはの顔が更に赤くなった。

「嬉しかった」

「えっ？」

俺の言葉になのはが驚いた顔をする。

「なあなのは、俺と一緒にいるのは嫌か？一人でいるほうが楽しいのか？」

「……………」

なのはの顔を見ながら聞く。

だが、なかなか答えてくれない。

「もしお前が無理して俺と遊ん」

「そんなことない！！」

なのはの声が公園に響く。

幸いこの公園には俺達以外誰もいないから注目されるようなことはなかった。

「そんなこと…ないよ…。刹那ちゃんと遊ぶの大好きだよ。一緒に遊んで、一緒に笑って、毎日が本当に楽しかった」

なのはは俯きながら喋り続ける。

「でもお父さんが入院して、お母さん達忙しくなって…。私が我が儘言ったり甘えたりしたら、みんなに迷惑かけると思って、刹那くんにも嫌われると思って…」

「なのは…」

「だから…私がいい子にすれば、一人でいい子にすれば、私が」

なのはが顔を上げた瞬間、俺はなのはを抱きしめた。

「せつ」

「我慢しなくていい」

なのはが何か言おうとしたが俺の声で遮る。

「我が儘言ってもいい、甘えてもいい、一人が嫌なら傍にいてやる。」

「……………」

なのはは何も喋らない。

それでも話を続ける。

「だから悲しいなら、苦しいなら俺にも分けてくれよ。全部受け止めてやるから。お前の悲しみも苦しみも」

「…本当に？」

さつきまで黙っていたなのはの口が開く。

「本当に…いいの？」

「ああ」

「いっぱい我が儘言うかも知れないよ？甘えるかも知れないよ？」

「全部受け止めてやるって言っただろ」

「…うう…グスッ…」

必死で涙を我慢しようとする声が聞こえる。

「もう…一人にならなくて…いいの？」

「ああ」

なのはの声がだんだん震えていく。

「もう…我慢…しなくて…いいの？」

「ああ」

「傍に…いてくれる?」

「ああ、だってお前は俺の大好きな友達だからな」

「うわああああああん!!寂しかったよおお!!」

俺の服を強く握りしめ、大声をあげて泣き出した。

俺は泣き止むまでの間、なのはの頭を撫でながら抱きしめていた。

なのはが泣き止んだのは、それから数十分後だった。

s i d e o u t

「落ち着いたか?」

「うん…刹那くん…ありがとう」

なのはは笑みを浮かべる。

でもその笑顔は、さっきまでのと違い、明るい笑顔だった。

「どういたしまして…さて」

急に刹那はベンチから立ち上がる。

「まだ時間はある。何して遊ぶ？」

「ふえ？」

刹那の質問に思わず、首を傾げるなのは。

「まだ帰るには早い。それに最近遊んでなかったんだ、久しぶりに遊ぼうぜ」

「刹那くん…うん!!」

「それじゃ行くぞ、なのは」

刹那は手を差し出す。

「うん!」

なのはは、その手をしっかりと握りしめた。

そして二人は帰る時間ギリギリまで遊んでいた。

その間、なのはの笑顔が絶えることは一度も無かった。

第5話 声

『た……て』

まただ

またこの場所に来てる。

〈刹那 side〉

俺は一年前から不思議な夢を見ている。

自分が何も無い真っ白な世界に立っていて、何処からか知らない声が聞こえて来る。

どれだけ走り回って探しても誰もいない。

そうしている間に夢が終わる。

『た……て』

そして今も俺はその夢の中にいる。

『た……て』

今日も声が聞こえて来る。

周りを見るが、やっぱり誰もいない。相変わらずの真っ白だ。

『わ……の……え……き……て』

声は所々欠けていて何を言っているのか全然分からない。

『わ……し……こ……い……い……』

今も尚、声は響き続けている。

まるで必死に何かを伝えようとしているかのように

気づいてほしいかのように

「君は…誰なんだ？」

俺は、この声に向かって問い掛けてみる。

この質問も、一体何回しただろうか。

やはり返事は返って来ることは無く、俺の声が虚しく響くだけだった。

「刹那、起きなさい。朝よ」

「…ん…母さん」

母さんの声で俺は目を覚ました。

「めずらしいわね、刹那がこんな時間まで寝てるなんて…具合でも悪いの？」

心配そうな顔で聞いてくる。

「大丈夫。ちょっと遅くまで本読んでただけだから」

俺は心配かけないように笑って答えた。

「そう、でもあんまり夜更かししたらダメよ？」

「うん」

「よろしい！ご飯できてから早く着替えて来なさい」

そう言っただけ俺の部屋から出て行こうとしたが、突然扉の前で立ち止まり、俺の方に振り向いた。

「あつ、刹那」

「何？」

「おはよう」

母さんは綺麗な笑みを浮かべて俺に言った。

「おはよう、母さん」

こうして、俺の一日が始まった。

「いただきます」

その声を合図に朝食を食べ始める。

相変わらずどの料理も美味しい。

前世では料理は自分で作っていたから人並みにはできるが、母さんのと比べると劣っている。

だからよく手伝いながら料理を教わっている。

でもやはり母さんの作る味には勝てない。一体何が違うんだ？

そんなことを考えながら朝食を食べていると

「今日もなのはちゃんと遊ぶの？」

俺の向かいの椅子に座っていた母さんが尋ねてきた。

「うん。とりあえず公園で待ち合わせにしてる」

「本当に仲が良いのね。」

「うん。大事な友達だから」

笑顔で返し、食べるのを再開する。

母さんは微笑みながら俺が食べている姿をずっと眺めていた。

s i d e o u t

くなのはs i d e

「遅いな〜刹那くん」

ベンチに座り、足をブラブラと動かしながら私は刹那くんを待っている。

とは言っても、まだ約束の時間まで30分もある。

単に私が刹那くんと遊ぶことが待ちきれなくて早く来過ぎてしまっ

ただけなんだけど。

あの日から二ヶ月。

あれから私はまた刹那くんと一緒に遊ぶようになったの。

やっぱり刹那くんと一緒にいると楽しい。

それに彼の隣はどこか温かくて心地好い。

また一緒に遊べて本当に良かったの。

それに、もう一つ嬉しいニュースがあるの。

それはお父さんが目を覚ました事なの。

目を覚ましたのは一ヶ月前の事で、病院から電話でお父さんの意識が戻った事を聞いて急いで病院に駆け付けたの。

病室に入ると、まだ体中包帯だらけだけど、私達を見て微笑むお父さんがいた。

私もお母さんもお父さんが目を覚ましたことに思わず涙が出ちゃったの。

お医者さんからは、後遺症も無いから怪我が治り次第に退院できるだろうと言われ、みんな安心していたの。

「えへへ」

思わず笑みがこぼれちゃう。

あの時、一人で抱え込んでいた時は必死に笑顔をつくり、なるべく他人と関わらないようにしていた。

迷惑をかけないように、嫌われないように。

それが今では自然に笑っている。

友達が来るのを今か今かと待ちきれないでいる。

まるであの頃の自分が嘘のように思えて、可笑しくてつい笑っちゃったの。

これも刹那くんのおかげ。

彼がいなかったら、きっと私は今でも一人で抱え込んでいた。

お父さんが目覚めても、またいつもの生活に戻っても、私は家族と少し距離を置いていたと思う。

でもあの時、刹那くんが来てくれたから、抱きしめてくれたから、私の心は救われた。

我が儘言っても良い、甘えても良い、一人が嫌なら傍にいてやる

全部受け止めてやるから、お前の悲しみも苦しみも

「……………」

思い出すと顔が赤くなる。

胸がドキドキしているのが分かる。

考えに没頭していたせいで気が付かなかったけど、いつの間にか集合時間まであと10分になっていたの。

「早く来ないかな……………ん？」

胸の鼓動も落ち着いて少しぼんやりしていると木の上に何かいることに気がついた。

「あれは…」

私はベンチから立ち上がり、その木に近づいた。

side out

刹那side

「行ってきます」

「行つてらっしゃい、車に気をつけてね」

家を出て公園に急いで向かう。

走った甲斐もあり約束の時間の10分前に着いたが公園にはもう既になのはが来ていた。

なのはは上を見上げながら佇んでいた。

「おはよう、なのは」

俺は軽く手を挙げ、なのはに声をかける。

「あつ、刹那くん」

「どうしたんだ？」

浮かない顔をしていたことに疑問に思い聞いてみた。

「あそこに…猫が」

なのはは自分が見ていた場所を指さした。

「猫？」

指された場所に視線を向けると、木の上で震えている猫の姿を見つけた。

「ホントだ…。降りられなくなったのか…」

「かわいそう…」

なのはが悲しい目で猫を見つめる。

猫は震えながら、今にも落ちてしまいそうだった。

周りには俺となのは以外いない。

「……しょうがないな」

俺は木に登り始めた。

「刹那くん！？ 危ないよ！」

「大丈夫、心配するな」

「でも…もし怪我でもしたら…」

そう言っている間に、猫がいる場所に辿り着く。

「おいで」

猫に向かって手を伸ばす。

猫は警戒するような目で俺を睨み、その場から動こうとしない。

「大丈夫。怖くないから、おいで」

優しく声をかけると気持ちが通じたのか、少しためらう様子を見せながらも俺の手に飛び乗った。

俺は猫を抱きかかえて木から飛び降り、綺麗に着地する。

「刹那くん、大丈夫!？」

なのはが慌てて聞いてくる。

「大丈夫、怪我は無いよ」

「良かった」

俺は抱いていた猫を下に降ろす。

すると猫は公園の外に向かって走って行ってしまった。

「ありがとね、刹那くん。猫を助けてくれて」

「どういたしまして。これから何する？」

「うーん、かくれんぼ!！」

なのはは少し悩んだ後、すぐに明るい声で提案した。

「最初は私が鬼するから刹那くんは隠れてね。公園から出たらダメだよ？」

「分かってる。」

「それじゃいくよ、いち、に、さん、………」

なのはが数えている間に場所を探す。

ちょうど良い隠れ場所があったので、そこに身を隠した。

「もういいかい？」

遠くからなのはの声が聞こえる。

「もういいよ」

俺もなのはの声に応える。

後は見つかるまで待つだ

「刹那くん、見つけ！！」

「……………」

まだ探して1分も経ってないはずだが…

楽しい時間というのは、あっという間に過ぎていくと聞くが、まさにその通りだった。

空は茜色に染まり帰る時間が迫っていた。

「じゃあ、また明日な。なのは」

「うん！また明日」

なのはを家まで送って行き、お互いに手を振りながら別れた。

俺は自宅までの道程を遊んでいた時のなのはの顔を思い出しながら歩いていた。

以前のような暗い雰囲気は、もう何処にも無かった。

土郎さんの意識が戻ったことで桃子さん達にも笑顔が戻った。

本当に良かった。

またいつものなのはに

またいつものみんなに

戻ってくれて…本当に嬉しかった。

そう思いながら家に帰っている時だった。

『助けて』

「っ!？」

声が頭の中に響いてきた。

「この声は…」

『助けて』

「間違いない、あの声だ」

夢の中に出てきた声

あの声が鮮明に聞こえた。

「（呼んでる…）」

気がついたら俺の足は声のする方に向かって自然と動いていた。

side out

第6話 契約（前書き）

遅くなつてしまいましたが

第6話です。

どうぞ！！

第6話 契約

太陽は沈み、空は夜を迎える。

道に並ぶ街灯と月の光に照らされながら刹那は走っていた。

『助けて…』

ただひたすらに声のする方に向かって。

そして刹那はある場所の前で足を止める。

「ここか…」

そこは小さな森だった。

木や草が生い茂っており、夜ということもあってか不気味な雰囲気
を醸し出していた。

そんな中、刹那は臆する事なく森の中に入り、進んでいく。

謎の声を頼りに。

『助けて…』

徐々に声は大きくなる。

「ん？」

森の中を進んでいると不意に淡く光っている場所が刹那の目に入った。

「何だ？」

刹那はその光に近づく。

そこには自ら光を放つ蒼くて丸い綺麗な宝石があった。

「これは…」

刹那はその宝石に手を伸ばす。

徐々に刹那の手は宝石に近づいていく。

そして宝石に触れた。

その瞬間、宝石が急に光を増した。

刹那は、その光に思わず目を瞑る。

そして光が治まり目を開けると、そこはさっきまでいた森の中ではなく、刹那が夢で見た真っ白な世界だった。

〈刹那 side〉

「ここは…」

俺は立ち尽くしていた。

さっきまで森の中にいたはずが、あの宝石に触れた瞬間この世界に
来ていた事に内心驚いていた。

今はだいぶ落ち着いたが、これからどうしようか。

夢と同じで相変わらず周りには何も無い。

さっきまで聞こえていた声も、此处に来てから全く聞こえなくなっ
た。

おそらく闇雲に進んでも夢の時と同じで見つからないだろう。

そんなことを考えていると

「まさか」

突然俺の背後から男の声が聞こえてきた。

俺はすぐに振り向き、声のする方を警戒する。

コツ、コツ、コツ

靴の音が周りに響きわたる。

そこから現れたのは藍色の髪をした背の高い男だった。

「私の結界の中に侵入した者がいたから、一体どんな者かと思って来てみたら、まさかこんな子供だったとは」

男は俺に近付いてくる。

その間も俺は警戒を緩めることは無い。

「そんなに警戒しなくても大丈夫だよ、ちょっと話をしに来ただけだから」

男は笑いながら俺に言った。

彼に不穏な気配を感じない事を察し、彼に対する警戒を解く。

「すみません」

「はは、気にすることは無い。君が警戒するのも無理は無いからね」

俺は彼に謝ったが彼は何事も無かったかのように笑って許してくれた。

「ところで君の名前は？」

「神谷刹那です。貴方は？」

「私はシャーニッド・サーストン。よろしく、小さな魔導師君」

「魔導師？」

俺は彼の言った”魔導師”という言葉に疑問を持った。

「もしかして君…魔導師を知らない？」

シャーニッドさんは驚いた顔で俺に尋ねてきた。

「はい」

俺は頷く事で彼の質問に答えた。

「それじゃあ君はどうやって此処に？普通は簡単には入れないはずなんだけど」

「声が聞こえたんです。それで声のする方に来たら光る蒼い宝石を見つけて、それに触れたら此処に来了ました」

「声…刹那君、それはどんな声だった？」

シャーニッドさんは真剣な顔で俺に尋ねる。

「女性の声でした。とても綺麗で…だけど悲しそうな」

「…なるほど、そういうことか」

俺の話を聞いて納得したシャーニッドさん。

だが俺には何が何だかさっぱり分からん。

「ちょっと失礼するよ、刹那君」

そう言うとシャーニッドさんは俺の頭に手を乗せる。

「口で説明すると長くなるから、手っ取り早い方法で教えるよ。実際に体感したほうが君も信用できるだろうし」

「一体何を…！？」

その先の言葉が出なかった。

俺の頭の中に大量の情報が次々と流れ込んでくる。

流れ込んできた情報は、やがて俺の中で知識へと変わり理解する。

魔導師、リンカーコア、デバイス、ロストロギア、時空管理局

そして…魔法

「理解したかい？」

俺の頭から手を離れたシャーニッドさんが聞いてくる。

「はい、まさか魔法なんてものが存在していたなんて」

小説の中だけの話だと思っていただけに衝撃も大きかった。彼が嘘をついていることも考えたが、そんなことをするメリットなんて何処にも無い。何より実際にこの身で体感したので信じるしかない。

「この真っ白な世界も魔法なんですか？」

「そうだよ。ここは私が魔法で作り出した結界だ」

「なんでもありませんね、魔法って…」

最早驚きを通り越して呆れてくる。

「さて、理解してくれたところで、刹那君」

「何ですか？」

「僕について来て。君に見せたいものがあるんだ」

そう言つて、シャーニッドさんは歩き出す。

とりあえず俺も彼の後ろをついて行くことにした。

歩く間、俺とシャーニッドさんは何も喋らなかった。

先頭を歩くシャーニッドさん。

その後ろについて歩く俺、お互いの足音しか聞こえない中、俺達はひたすらに進んでいた。

でも俺に見せたいものって何だ？

「着いたよ」

突然シャーニッドさんが立ち止まり、声をかける。

身長差があるせいか前が良く見えない。

彼の横に移動することで、ようやく前の景色が見えるようになる。

そして俺は言葉を失った。

それくらい目の前にある物にこれ以上ないほどに心引かれた。

そこには大きな水晶の中で、祭壇のような場所に突き立てられた一本の刀があった。

「どう、刹那君？アルカディアスは」

「アルカディアス…？」

「あの刀の名前さ。君はあの刀を見てどう思う？」

隣にいたシャーニッドさんに聞かれ、俺はアルカディアスと呼ばれる刀を再度見る。

白銀の刃、金の鍔に白い柄。

分かる、あれは

「あれは、あの刀は…自分の物のような気がします」

「…どうして、そう思ったの？」

「分かりません。ただあの刀を見たとき、”あれは俺のだ”って思っただけです」

「そうか…」

俺の答えを聞くと、シャーニッドさんは嬉しそうに、けどどこか悲しそうに笑った。

「なら行きなさい。あの刀の元へ行き、自分の手で私から奪い取りなさい」

「はい」

俺はしっかりと足取りでその刀に近づく。

中の刀を守るように存在している水晶の前で足を止め、触れる。

すると水晶に亀裂が走り、それが全体へと広がっていき、やがて音を立てて割れた。

そして光が溢れる。

砕け散った水晶の破片がその光に反射されキラキラと降り注ぐ。

幻想的な光景だった。

水晶が無くなったことで俺は目の前にある刀と対面する。

『はじめまして、ずっと貴方を待っていました…マスター』

すると突然、刀が喋り出した。

この声だ。間違いない。

「君が俺を呼んだのか？」

『はい』

「どうして？」

『寂しかったんです、私』

寂しかった？

『私は生まれてすぐにお父様の結界の中に封印されました。私の力が強力で扱える人間がいなかったんです。でも私にとって、それは辛いことでした』

アルカディアスは辛そうな声で語る。

『私は嫌でした、一人で此処にいることが…。本当は自分が決めた主と一緒にいたかった。同じ世界を見て、同じ道を進みたかった。だから私は求めました。お父様の結界に進入でき、私を扱えるほどの魔力と正しく使ってくれる優しい心を持つ人を。そして貴方を見つけました』

「俺を？」

『はい。私を扱えるほどの魔力をその身に宿し、人のために一生懸命になれる強くて優しい心…。私は貴方を見つけて思いました。”この人が私のマスターだ”と』

「ちょっと大袈裟すぎるだろ」

気恥ずかしくなり、俺は顔を逸らす。

『ふふ、これが私の本心なんです…では貴方に聞きます』

アルカディアスの声が真剣なものへと変わり

『貴方は、私のマスターになってくれますか？』

と俺に言ってきた。

「マスター…」

俺はそつと呟く。

「よく考えた方がよいよ。これは遊びじゃない。魔法に関わることで、戦わなければならない事もあるかもしれない。傷つくことだって、最悪死ぬことだってありえる」

シャーニッドさんも真剣な表情で俺に言う。

彼の言いたい事は分かる。

俺がアルカディアスのマスターになること、魔法に関わることで危険な道を歩まなければならないかもしれないということも、この選択で俺の運命が大きく変わるかもしれないということも。

俺がここでマスターにならないと言っても、またいつもの平和な日常に戻る。

でも俺がここで断ったら、アルカディアスはどうなる？

また探し続けるのか？

いるかどうか分からないマスターを…。

俺は彼女の声を聞いた。

悲しそうに叫ぶ彼女の声が。

俺は彼女の声に応えたい。

その先に戦う事が待っているなら進んでやるさ、彼女と共に…！

だから…

「なつてやる」

『え？』

「俺が…お前のマスターになつてやる」

俺は彼女と同じ道を歩む事を選択した。

『本当に…よろしいのですか？』

「ああ」

『戦う事もあるんですよ、死ぬかもしれないんですよ？』

「覚悟はできている」

『どうして…ですか？』

「聞こえたから…お前の声が。お前の心がずっと”助けて”って叫んでいるのが聞こえたから」

『……………』

「それに、俺もお前と同じ世界を見たい。だから俺の相棒になつてくれ。アルカディアス」

『……………はい……………』

彼女の声は震えていた。

もし彼女に身体があつたら、きっと涙を流していただろう。

だけどその涙は決して悲しみから来る涙じゃない事は彼女の声を聞けば分かる。

「刹那君」

後ろにいたシャーニッドさんが俺を呼ぶ。

「本当に…良いんだね？」

「はい」

「分かった…なら、もう何も言わない」

そう言つとさっきまで真剣な表情をしていたシャーニッドさんが

「この子の事、よろしく頼むよ」

優しく微笑んだ。

『お父様…』

「すまなかつたな。今まで、寂しい思いをさせてしまつて。親らしい事も何ひとつしてやれなくて」

『そんなことありません。お父様のおかげで私は生まれることができました。今まで本当にありがとうございました』

その言葉を聞くと、シャーニッドさんは、ふつと笑つた。

「では、私もそろそろ逝くでしょう」

『…お疲れ様でした、お父様。ごゆっくりお休みください』

「ああ、さらばだ」

そう言つてシャーニッドさんは光りに包まれ、消えた。

「シャーニッドさんは…」

俺は彼女に聞く。

『…お父様は結界の維持のために自らの魂をこの結界と同化させたいんです』

「魔法というのは、そんな事もできるのか？」

『いえ、これはお父様にしかできません』

「…凄い人だったんだな」

『はい、命を賭けて私を守ってくださいました。私の自慢のお父様です』

「そうか」

『ですが、お父様がなくなり、結界もすぐに消えてしまつてしまう。だからマスター、その前に…』

「ああ」

俺はアルカディアスの柄を掴む。

『もう一度聞きます。私のマスターになつてくれますか？』

「ああ」

『ここに、契約は完了しました』

「これからよろしくな、アルカディアス」

『はい、マスター』

俺はアルカディアスを勢いよく引き抜いた。

そして…結界が消えた。

目を開けると、そこは森の中だった。

「どうやら、無事に戻って来れたみたいだな」

『そのようですね』

どこからかアルカディアスの声が聞こえたが、周りを見ても彼女の姿は何処にも無い。

『ここです、マスター』

彼女の声が自分の右手の方から聞こえ、握っていた右手を開くと、俺が結界の中に行く前に見た蒼い宝石があった。

『マスター、私が言うのも難ですが、早く家に戻られた方がよろしいかと。きつとご両親も心配されているでしょうし』

「それもそうだな」

今現在の時間は分からないが、少なくとも夜であることは間違いない。

母さんや父さんも心配しているだろう。

『それじゃあ行きましょう、マスター』

「ああ」

俺は森を出て家へと向かう。

母さん達に怒られる事を覚悟しながら。

余談だが、家に帰った俺を待っていたのは母さんと父さんの説教だった。

普段怒らないから余計に迫力があり、俺はなるべく二人を怒らせないようにしようと決心した。

第6話 契約（後書き）

というわけで、刹那がデバイスを手に入れた話でした。

次回は、刹那達の小学校生活。あの二人を出そうかなあと計画しています。

もしかしたらデバイス等の設定が先かもしれませんが。

あるいは、全く別の話になるかも……。

どちらにしても、楽しみにしていただけると幸いです。

感想等もお待ちしております。

では、また次回！！

第7話 学校!!（前書き）

約一ヶ月ぶりの更新です。

今回はあの二人が登場します。

オリキャラやデバイスの設定は原作に突入する前に書こうと予定しています。一つの区切りとして。

それと、この小説が10000アクセスを突破しました!!

すごく嬉しいです。

これも皆さんのおかげです。本当にありがとうございます!!

これを励みに頑張っていきたいと思いますので、これからもよろしくお願いします。

では第7話です。

どうぞ!!

第7話 学校！！

「という訳で、この問題は」

教科書を片手に教壇に立つて教えている教師の声が教室内に響く。
白いチョークを使って黒板にスラスラと文字を書いている。

まだ幼い生徒達も教師の言葉を聞きながら、黒板に書いてある文字をノートにしっかりと書き写している。

その生徒達の中には、我等が主人公の神谷刹那の姿もあった。

白を基調とした清潔感溢れる制服に身を包み、他の子供達と同様に授業を受けていた。

刹那 side

「それじゃあ次はさっきの解き方を使いながらこの問題をやってみましょう」

今は算数の時間。

先生が黒板に書いた問題をノートに解いていく。

周りを見てみると、みんな悩みながらも頑張って答えを導き出そうとしていた。

一足先に解いてしまった俺は、自分の席が窓側に位置しているので、答え合わせの時間になるまで窓から見える空をずっと眺めていた。

月日は流れ、俺はなのはと一緒に聖祥大付属小学校に入学した。

入学式の日には制服を着たなのはがウキウキとした様子だったのを覚えてる。

その時になのはが何度も俺に「どうかな？」なんて自分の制服姿を見せながら聞いてきたから、「似合っている」と素直に答えたら顔を赤くしてしまい、風邪かと思い心配になって声を掛けたら、桃子さんと母さんが溜め息を吐きながら

「刹那君は、もうちょっと女の子の気持ち分かかってあげないとね」

「普段は、いろんな事に気がつくのに、女の子の事になるとどうしても鈍くなっちゃうのかしら」

と言われた。

今でもその言葉の意味は分かっていない。

ちなみに士郎さんだが、無事退院して今では桃子さんと新婚夫婦顔負けの甘い雰囲気を出しながら一緒に翠屋で働いている。

最初は入学式までに退院はできないと医者に言われていたが、驚異の回復力で入学式一ヶ月前に退院し、入学式当日ではなのはの晴れ姿をカメラに収めていた。

有り触れた光景、何気ない毎日、そんな日々を過ごす俺だったが、たった一つの出会いによって俺の日常は少しだが確実に変化した。

魔法

それが俺の日常に変化をもたらしたものの

アルカディアスのマスターになった事で俺は魔法の世界に足を踏み入れた。

余談だが、以前俺が引ったくりを素手で倒したり、恭也さんと初めて戦った時の身体の違和感は魔法によるものとわかった。

魔法による身体能力強化だとアルカディアスは言っていた。

話を戻すが、それからというもの、俺はアルカディアスの指導の下で日夜魔法の訓練に励んでいる。

実は今この授業中でも現在進行形で魔法の特訓は行われている。

二つ以上のことを同時に処理する”マルチタスク”を使った訓練。授業を真面目に受けている一方で頭の中で何回も戦闘のシミュレーションを行っているのだ。

「じゃあ、この問題を…神谷君にお願いしようかな？」

答え合わせの時間になり、先生が俺に解くように言ってきた。

「はい」

返事をして俺は立ち上がり黒板へと向かい答えを書いていく。
勿論、途中の式を書く事も忘れてはいない。
答えを書き終え、チョークを置く。

「はい、よくできました」

笑顔で褒めてくれた先生の言葉を聞いて、俺は自分の席に戻った。

キンコーンカーンコーン

「はい、じゃあ今回はこれで終わり」

「起立、礼」

授業が終わり昼休みを迎える。

それによって生徒達も動き出す。

授業で使った教科書やノートを仕舞い、なのはが来るのを待つ。

というのも俺となのはは、お互い別々のクラスになった。
そのことではが拗ねてしまい登下校と昼休みを一緒に過ごすという事で落ち着いた。

ガラッ

噂をすれば

「刹那くん」

弁当持ったなのは笑顔で俺に手を振ってきた。

「ああ、今行く」

俺も自分の弁当を持ってなのはと一緒に屋上へ行き、弁当を食べながら昼休みを過ごした。

全ての授業が終わり放課後になる。

他の生徒達が友達同士で帰っていく中、俺は一人である場所に足を運んでいた。

なのはには直ぐに済むと言って待ってもらっている。

【どこに向かってるんですか、マスター？】

黙々と廊下を歩いている俺に、アルカディアスが尋ねてきた。

ちなみに今の声は念話と呼ばれる魔法で俺にしか聞こえないから周りに聞かれる心配は無い。

【図書室だ。先日借りていた本を返そうと思ってな】

【たしか、返却日はまだ先のはずではありませんでしたか？】

【そうだけど、本も読み終わってたし、この本を早く読みたいって人もいるかもしれないからな】

【ふふ、マスターらしいですね】

【何か言ったか？】

【いいえ、何でも】

どこか嬉しそうに喋るアルカディアスに疑問を持ちながらも歩き続けていると目的の図書室に着いた。

中に入った俺は本を返すためにカウンターへと向かい、図書室を管理している先生を見つけた。
どうやら生徒と話をしているようだ。

「あら？神谷君」

話が終わるまで待っていようと思ったんだが、先生の方から声を掛けてきた。

「こんにちは、先生」

「もしかして本を返しに来てくれたの？」

「はい、読み終わりましたし、他にも読みたい人がいると思ひまして」

「ちょうど良かったわ、今この子が君の借りていた本を借りたいて言つてたから」

「そうだったのか？」

俺はさっきまで先生と話していた生徒に目を向ける。

紫色の長い髪をした大人しそうな女の子で年はたぶん俺とあまり変わらないだろう。

「う、うん」

彼女はやや緊張気味に頷く。

「そうか、なら早く返しに来て正解だったな」

俺は微笑みながら彼女に言い、本の返却の手続きをして彼女に本を渡した。

「ほら」

「……………／／／」

俺から本を受け取った彼女は恥ずかしそうに顔を赤くして俯いた。

たぶん人と会話するのがあまり得意ではないんだろう。

「それじゃあ俺はこれで」

なのはを待たせているという事もあり、用が済んだ俺は彼女と先生にそう言つて図書室を後にした。

s i d e e n d

）？？？s i d e（

「（行っちゃった…）」

彼の後ろ姿を見ながら私はそう思った。

「あの、さっきの人は…」

私は彼の事を先生に聞いてみた。

「ああ、あの子ね。あの子は神谷 刹那君って言って、貴女と同じ1年生よ」

「私と同年…」

「ええ、本を読むのが好きでね、よく本を借りに来てくれるのよ」

「そっなんですか…」

その後私は、彼が返却した本を借りて先生に挨拶して図書室を出た。
私しかない廊下を歩く中、私はさっきの男の子とのやり取りを思
い出す。

そういえば同い年の男の子と話したのは、これが初めてだったかも
しれない。
クラスでは自分の方から他の人とお喋りしたことなんて無かったか
ら。

「神谷 刹那君…かあ」

優しいそうな人だったなあ。

そう言えば、お礼言いそびれちゃった。

私と同じ1年生だって先生が言ってたから、きつといつかまた会え
るはず…、そしたら今度はちゃんとお礼を言おう。

そんな事を考えながら私は家に帰った。

side out

〈刹那side〉

あれから一週間経ったある日の放課後。

帰る準備を済ませ、なのはを待っているのだがいつまで経っても来ない。

いつもは放課後になつたら直ぐに俺の教室に来るのに…。

心配になった俺はなのはを探そうと教室を出た。

なのはの教室に行ってみたが彼女の姿は無かった。

その後、なのはの行きそうな場所に足を運んでみたが何処にもいなかった。

『一体、なのは様は何処に行かれたんでしょうか？』

アルカディアスが心配そうな声で聞いてくる。

「分からない。何事も無ければいいんだが…」

そう言った時だった。

パンツ

微かだが、渴いた音が耳に届いた。

『マスター、今の…』

「ああ、近いな」

俺は音のした方に向かって走った。

するとそこには三人の少女がいた。

一人はこの前図書室で会った紫色の髪をした少女。

もう一人はカチューシャを持ち、もう片方の手を叩かれて赤くなつた左頬に添えて、驚いた表情をしている金髪の少女。

そしてその金髪の少女を叩いたと思われる最後の一人が

「なのは？」

俺がさっきまで探していた少女だった。

『マスター、なのは様が！？』

アルカディアスが慌てた声で俺に聞いてくる。

「…もう少し様子を見よう。なのはが理由も無しに他人を傷付けるとは思えない」

そう言つて三人の様子を眺める。何かあつた時にいつでも対処できる用意をしながら。

「な、何すんのよ！！」

おそらく叩かれた事に対する怒りからだろつ。

金髪の少女はなのはを鋭く睨みつけた。

「痛い？」

すると不意になのはが金髪の少女に問い掛けた。

「当たり前でしょ!!」

当然のようになのはの言葉に答える。

「でもね、大切なものを奪われた人の心は、もっともっと痛いんだよ!」

「……っ」

なのはの言葉に金髪の少女はたじろぐ。

それでも睨みつける事は止めない。

「（なるほど、そういう事か）」

俺は今のやり取りで、事情を察した。

金髪の少女が持っているあのカチューシャ、あれはあの紫髪の少女のものだろう。

図書室で会った時もあんな感じのカチューシャをつけていたのを覚えてる。

おそらく金髪の少女があのカチューシャを奪い、困っていた所をなのはが見つけて今に至るといったところか。

「……っの!」

突然、金髪の少女がなのはに掴みかかった。

なのはも負けじと金髪の少女に掴みかかり、取っ組み合いになった。

『マ、マスター！ 喧嘩になっちゃいましたよ。早くやめさせないと！？』

二人を心配してか、かなり焦った声を出すアルカディアス。俺に二人を止めさせようとしているが、俺はその場から動かず様子を見ていた。

『マスター！！』

「今ここで俺が喧嘩を止めに行っても、あの三人の為にはならない」

『どういう意味ですか？』

「あの喧嘩をやめさせる役は俺じゃないって事だ」

『では、誰が』

アルカディアスが言おうとした時だった。

「やめて！！」

叫び声がその場に響き渡った。

その声を発したのは、なのはでも、金髪の少女でもなく、事の発端でもあり、さっきまで二人の喧嘩を黙って見ていた紫髪の少女だった。

さつきまで喧嘩をしていた二人だったが、その声で動きを止める。

「戻るぞ」

『よろしいんですか？』

「ああ、もう大丈夫だ」

俺は静かにその場を離れて、教室に戻った。

しばらく教室で待っていると、なのはがやって来た。急いで来たのか、少々息が乱れていた。

「ごめん刹那くん。遅くなっちゃった」

「それくらい別に構わねえよ。ちょうど俺も用事があったからな。だから気にするな」

申し訳なさそうに謝るなのはに俺は彼女の頭を撫でながら答えた。

「ありがとう／＼　じゃあ帰ろっか」

二人で学校を出る。

ふと、なのはの顔を見ると何処かスッキリとした顔をしながら歩いていた。

それからさらに三日後

キンコーンカーンコーン

「起立、礼」

授業が終わり昼休み。

席に座った状態で伸びをした後、いつものようになのはを待つ。

ガラッ

「刹那くん」

俺は立ち上がり、弁当を持ってなのはと一緒に廊下を歩く。

「今日はね、なのはの友達も一緒なんだけど、良いかな？」

「なのはの友達？」

「うん、最近話すようになって仲良くなったから、刹那くんにも紹介しようと思って」

「俺は別に構わないが、お前の友達は良いのか？」

「うん、二人とも紹介してほしいって言ってたから大丈夫だよ」

二人とも？もしかして、なのはの友達って…

屋上の扉をなのはが開ける。

そこには先日なのはと喧嘩していた金髪の少女と二人の喧嘩を止めた紫髪の少女がいた。

「アリサちゃん、すずかちゃん、お待たせ」

なのはが二人の下へ歩いていく。

やはり友達っていうのは、この二人の事だったか。

俺も二人の下に行き、なのはと彼女達が会話をしているのを眺めていた。

「遅いわよ、なのは。待ちくたびれちゃったわよ」

「にははは、ゴメンねアリサちゃん」

「まあいいわ。それで？　なのはの幼馴染みってアイツ？」

アイツと言うのは、おそらく俺の事だろう。
金髪の少女が俺を見ながらなのはに聞いた。

「そうだよ　私の幼馴染みの」

「神谷　刹那だ。よろしくな」

なのはの言葉に続いて自己紹介した。

「ふーん、アンタがなのはの言ってた幼馴染みかあ」

「なのはが何か言っていたのか？」

金髪の少女の言葉に興味を持った俺は彼女に聞いてみた。

「ええ、かつこよくて頼りになるだいs「ダメEEEEEE!!／／
／」むがつ!？」

何か言おうとしていたが、突然なのはが大声を上げながら物凄い勢いで彼女の口を塞いだせいで聞き取れなかった。

その後も二人は俺達から離れてひそひそと話し出してしまった。

二人の行動にどうしたもんかと頭を悩ませていると

「あ、あの」

紫髪の少女が声を掛けてきた。たしかさっきの会話ですずかと呼ばれていたな。

「あの…私の事、覚えてますか？」

何処か自信がなさそうに彼女は聞いてくる。

おそらく図書室で会った時の事を言っているんだろう。

「ああ、この前図書室で会ったよな。あの時の本はどうだった？」

「あ、うん。とっても面白かったよ。あの時はありがとう、刹那君」

俺が覚えていた事に驚いた顔をしたが、それは一瞬の事で直ぐに笑顔で月村は答えてくれた。

「私はアリサ、アリサ・バニングスよ」

「私は月村すずか。よろしくね、刹那君」

さっきまで離れて会話をしていたのはとバニングスが戻って来た後、バニングスと月村が自己紹介してくれた。

「こちらこそよろしく。バニングス、月村」

「アリサでいいわよ。これから仲良くしていくんだから、名前で呼びなさいよ」

「私も名前で呼んで欲しいな、刹那君が良かったらだけど…」

「分かった。二人が良いなら呼ばせてもらうよ。アリサ、すずか」

そして互いの自己紹介を済ませた俺達は弁当を食べながら昼休みを過ごした。

その日の夜

俺は今日の出来事を父さんと母さんに話していた。

「まあ、新しい友達ができたの？良かったじゃない」

「それも二人とも女の子かあ、優衣、俺達の息子はモテモテだなあ」

「ふふっ、そうね」

二人が微笑みながら俺をからかってくる。

「からかわないでよ、父さん」

「ハハハ、スマン、スマン。しかし折角できた友達だ。大事にしるよ？」

「刹那なら大丈夫よ、あなた。ねえ刹那？」

「うん」

二人の言葉に俺は頷く。

「よし！それじゃあ話は変わるんだが、再来週の土、日に家族で旅行に行かないか？」

「「旅行？」」

突然の父さんの提案に俺と母さんは思わず父さんに聞き返す。

「ああ、休みが取れてね、刹那の入学祝いもかねてどうかなと思って」

「良いわね、私は賛成よ。刹那は？」

「俺も賛成。予定も入ってないし」

「じゃあ再来週の土、日は家族で旅行に決まりだな」

こうして俺の入学祝いを兼ねた家族旅行が計画された。

しかし、俺はこの時止めるべきだった。

そうしたら、あんな悲劇は起こらなかったはずなのに…。

現実残酷だ。未来を知る事も過去に戻る事もできない。

だからその時の俺は、これから起こる悲劇をただ待つことしかできなかったのだ。

s i d e o u t

第7話 学校！！（後書き）

アルカディアス「どういう事が説明していただけますか？」

ひなたぼっこ「な、何の事でしょうか？」

アルカ「どうして最後、明らかにマスターの身に何か起こるような展開にしたのですか？」

ひなた「そ、それは……」

アルカ「もしもマスターの身に何かあったら……」

ひなた「何かあったら？」

アルカ「覚悟しておいてくださいね」

ひなた「（俺：死んだかも）」

刹那「それじゃあ次回もよろしく」

第8話 止まない雨（前書き）

どうも、ひなたぼっこです。

今回はシリアスです。

シリアスのつもりです。

では、第8話です。

どうぞ！！

第8話 止まない雨

「刹那 side」

アリスとずかど仲良くなってから、あつという間に時間は過ぎて行き、ついに以前から計画していた家族旅行の日になった。

『楽しみですね、マスター』

俺の首に掛かっているアルカディアスが嬉しそうな声で話す。

実は旅行に行くことと決まってからというもの、アルカディアスはずっとウキウキとした様子だ。

まあ今までずっとシャーニッドさんの結界の中にいて、俺がマスターになってからも海鳴市を出たことなんて無かったから、見たことの無い場所に行くのが楽しみでしょうがないんだろう。

「そうだな」

アルカディアスの様子に微笑みながら答える。

コン、コン

「刹那、準備できたか？」

ドアを軽く叩く音が聞こえたかと思うと、扉越しに父さんの声が聞こえた。

「うん、出来てるよ」

「そうか、なら自分の荷物を車のトランクの中に入れてくれ」

「分かった」

俺は旅行用の鞆を片手に部屋を出た。

s i d e o u t

くなのはs i d e

「刹那君、もう出発したのかな？」

「でしょうね、今頃楽しんでるんじゃない？」

「いいな、旅行」

私は今、すずかちゃんと一緒にアリサちゃんの家遊びに来ている。

アリサちゃんの家は、とっても大きくて正直ここに来たときすごくビックリした。

それで今はアリサちゃんの執事さんが入れてくれた紅茶を飲みながら、今旅行に行つててこの場にはいない刹那くんの話で盛り上がっていた。

「なのは、あんた刹那がいなくて寂しいんじゃないの？」

「わ、私そんなに寂しがり屋じゃないもん!!」

アリサちゃんが私をからかってきたので思わず否定する。

確かにちょっと寂しいと思ったけど…。

「ホントに？」

「うう」

アリサちゃんがニヤニヤとした表情で聞いてくる。

ちよっと思っただけに言い返す事ができず困っていると

「大丈夫だよ、なのはちゃん。アリサちゃん、なのはちゃんが来るまで刹那くんの話ばかりしてたんだから」

「ちよっと!?!? すすか!! / / /」

さっきまで紅茶を飲みながら私とアリサちゃんの会話を聞いていたすすかちゃんが助けてくれた。

だけど次はアリサちゃんが慌てだしてしまった。

「そ、そっいうすすかはどうなのよ!!」

仕返しと言わんばかりにアリサちゃんがすすかちゃんに聞く。

「わ、私！？えつと…正直ちょっと寂しいかな。授業中以外はいつ
も4人一緒だったから…」

恥ずかしがりながらも素直に答えるすずかちゃん。

「な〜んだ、みんな考えてることは一緒なんだね」

私は二人が自分と同じように思っていた事を嬉しく思った。

「フンツ！ 帰ってきたら覚えてなさいよ、刹那のやつ！」

アリサちゃんの言葉に私とすずかちゃんは苦笑する。

頑張つて、刹那くん。

「あ、雨…」

ふと窓を見たすずかちゃんが言った。

それを聞いた私とアリサちゃんも窓から見える外を眺める。

空は雲で覆われていて、雨が降っていた。

「なのはちゃん、帰りは私の家の車で送っていくよ」

「ありがとう、すずかちゃん」

外の様子を見て、家まで送ってくれると言ってくれたすずかちゃん
にお礼を言いながら、もう一度視線を窓へと向ける。

雨はさつきよりも少しだけ強くなっていた。

side out

〈刹那side〉

現在、車で目的地まで移動中。俺は後部座席に座り移り行く景色を窓から見ている。

「もう、あなたったら」

ふと笑い声が聞こえたので視線を前方へと移す。そこには楽しそうに会話をしている母さんと父さんの姿があり、二人の様子に思わず笑みが零れた。

【二人とも楽しそうに会話していますね】

そんな俺にアルカディアスが念話で話し掛けてきた。

【父さんと母さんは新婚旅行以来の旅行らしいからな、無理もないさ。ま、あの二人が仲が良いのは今に始まった事じゃ無いけどな】

【フフ、それもそうですね】

しばらくアルカディアスと念話で話している時だった。

「お、雨が降って来たな」

車を運転していた父さんが前ガラスに着いた雨滴を見ながら俺と母さんに聞こえるように言った。

「おかしいわねえ、天気予報によると、今日は雨は降らないって言うってたのに…」

母さんが外を眺めながら不満げに答える。

「ハハハ、天気予報だって外れることはあるさ」

父さんが笑いながら母さんを宥める。

そんなやり取りが続けられている中、俺は雨の中の景色を眺める。

どうしてだろう？

さっきまでなんとも思わなかったのに

ただ雨が降っているだけなのに

ただそれだけなのに

妙な胸騒ぎがするのは…。

s i d e o u t

くなのはs i d e

「すずかちゃん、送ってくれてありがとう」

時刻は昼。

アリサちゃんとすずかちゃんがお昼から習い事のお稽古があるという事で今日は御開きとなり、私はすずかちゃんの家の車に乗せてもらい、家まで送ってもらった。

「気にしないで。じゃあまた学校で」

「うん、バイバイ」

そしてすずかちゃんを乗せた車は帰って行った。

私もそれを見送った後、家に入った。

「ただいま」

私がそう言つと、お姉ちゃんが慌てた様子で出てきた。

「なのは!?!」

「どうしたの?お姉ちゃん、そんなに慌てて」

「今から病院に行くよ」

「え、病院?どうして?」

私は訳が分からず、お姉ちゃんに尋ねる。

するとお姉ちゃんは一瞬だけ悲しい表情をしたかと思うと、すぐに真剣な顔になった。

「いい？なのは、落ち着いて聞いて」

「う、うん」

「実は」

「え…」

その瞬間、私は頭の中が真っ白になった。

その後もお姉ちゃんは何か言っていたような気がしたが耳に入らなかった。まるでそこから先の話を全て拒絶するかのよう。

嘘だね。刹那くん達が

事故に遭ったなんて

s i d e o u t

話は遡る。

〈刹那 side〉

車は雨の中、目的地へと進んでいく。

そんな中、俺はさっきから感じる妙な胸騒ぎが気になってしょうがなかった。

「刹那？」

「な、何？母さん」

いきなり呼ばれた事に驚きながらも、視線を母さんの方に向ける。

「どうしたの？さっきからいつもと様子が変よ。もしかして気分でも悪いの？」

心配そうな顔で母さんが俺を見つめてくる。

「いや、大丈夫。心配ないよ」

「どこかで休憩しようか？」

俺を心配してか父さんが提案してきた。

「そうね、そうしましょう」

二人の間で話は進んで行き、近くのコンビニで休憩することになった。

顔に出さないようにしていたのに、敵わないな。

「ゴメン、父さん、母さん」

「気にしないでいいのよ、刹那」

「そうだぞ、せっかくみんなで行くんだ。みんなで楽しもう」

「…ありがとう」

二人の笑顔を見て自然と俺の顔にも笑みが零れた。

ゾクッ！！

嫌な予感がした。

「父さん、今すぐ引き返して！！」

俺はなりふり構わず叫んだ。

今は一刻も早く、この場から離れたかったから。

前世の頃から培ってきた本能が告げている。

逃げると、この先に行ってはならないと。

「どうした刹那。そんなに慌てて、忘れ物か？」

「説明は後でする！！だから今は」

その時だった。

横から大型トラックが走って来た。

赤信号であるにもかかわらず。

トラックはスピードを緩めることなく俺達の乗っている車に迫ってくる。

あと数秒も満たない内にこの車はトラックと衝突するだろう。

もう間に合わない。

死ぬ

そう直感した。

そしてトラックは車と衝突し、俺はその瞬間意識を手放した。

s i d e o u t

「なのはside」

病院に着いた私とお姉ちゃんは急いで刹那くんがいる手術室へと向かう。

途中何度か注意を受けたが、私は走ることをやめなかった。

そんなことを気にしている暇なんて今の私には無かったから。

手術室に着くと、そこには既にお母さんとお父さんとお兄ちゃんがいた。

三人とも辛そうな顔をしていた。

「お母さん!!」

「なのは!!」

私はお母さんの下へと走り、抱き着いた。

「お母さん、刹那くんが!!刹那くんが!!」

「大丈夫だから。刹那くんも、刹那くんのお母さんとお父さんもきつと大丈夫だから」

私はお母さんに抱きしめられながら大声で泣いた。

そのあと、お父さんとお兄ちゃんが警察の人の話を聞いている。

お兄ちゃんとはトラックの運転手がお酒を飲んでいた事を聞くと、その人に殴り掛かろうとしてお父さんに止められていた。

でもお父さんも怒りを一生懸命我慢しているように見えた。

ここに来てから何時間経っただろうか…

静かに時間だけが過ぎて行く中、私はずっと刹那くん達もどつてくるように祈っていた。

そして、手術中と書かれたランプが消え、扉が開き、中からお医者さんが出てきた。

「刹那くんは！！刹那くんは大丈夫なんですか！？優衣さんと修一さんは…」

「なのは、落ち着きなさい」

私は無我夢中でお医者さんに近付こうとしたが、お母さんに止められた。

それから少しずつ落ち着いて来た私はお医者さんの話を聞くことにした。

「子供さんの方は無事成功しました」

手術室から刹那くんが出てきた。

「刹那くん!!」

私は刹那くんに近付く。

刹那くんは所々包帯を巻かれてはいるが、しっかりと息をしていた。

良かった。

生きててくれて、本当に良かった。

「あの、優衣さんと修一さん…この子の両親は…」

お母さんはお医者さんに尋ねる。

そうだ優衣さんと修一さんはどうなんだろう？

でも刹那くんが大丈夫だったんだから、きっと無事だよな。

きっと

「…この子の両親は、出血が激しく、ここに運び込まれた時には既に手遅れの状態にあり、我々も全力を尽くしましたが、間に合いませんでした」

そう言ってお医者さんは頭を下げた。

「そんな…」

「クソッ!!」

お姉ちゃんはお医者さんの言葉にショックを受けていて、お兄ちゃんは近くの壁を強く叩いていた。

このことを刹那くんが知ったら、どう思うだろうか。
きっと深く悲しむに違いない。

そう考えただけですごく胸が痛い。

「刹那くん……」

私はこれから辛い現実に向面しなければならぬ刹那くんを思うと
耐え切れなくなり、彼の手を両手で握りながら涙を流した。

外はまるで今の私の心を映し出しているかのように強い雨が降っていた。

s i d e o u t

第8話 止まない雨（後書き）

アルカ「覚悟は…できてますね？」

ひなた「すみませんでした!!」

アルカ「いまさら言っても遅いです。では、なのは様。お願いします」

なのは「は〜い」

ひなた「な、何故ここになのは様がおられるのでしょうか？」

アルカ「デバイスである私には貴方を懲らしめることができませんので、なのは様にお願いしました」

なのは「行くよ!! デイバイイイイン…」

ひなた「ちょ、ちょっと待って!?! まだ貴女、その技使えな」

アルカ「細かいことは気にしないでください」

なのは「バスター!!」

ひなた「ギャー!?!」

アルカ「それでは次回もよろしくお願いします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3468u/>

魔法少女リリカルなのは ~ 悲しみを断ち切る者 ~

2011年11月10日00時16分発行